

ウィーン幻想

伊藤 富雄

2002年4月4日、常夏のシンガポールを経由して13年振りにウィーンの新シュベハート空港に降りたつと、外は氷雨が降りとても寒い。慌てて上着のボタンを留める。妻も手に持っていたコートで羽織る。空港までは20年以上も知り合いの友人Hが車で迎えに来てくれていた。「セアプス」とウィーンならではの挨拶を交わし、妻を紹介する。Hは妻とは初対面なのだ。Hのベンツに荷物を積みこみ、市内に向かうアウトバーンを走る。ウィーンの新シュベハート空港には鉄道も連絡しているのだが、発着の本数も少なく鉄道を利用する人はほとんどいない。大半の人はタクシーやリムジンバスを利用している。空港から市内までは車でほぼ30分程度だが、ヨーロッパは初めての妻は市内に向かう車の中から外の景色に見とれ、喜びを隠しきれないとも言えるように盛んに質問を浴びせてくる。「あの建物は何?」「あれはドナ河?」「あの塔はシュテファン寺院のもの?」あれこれ説明している間に市内に入る。懐かしい赤い車体の市電も走っている。「とうとう来たんだね。ウィーンの街へ」と私が言うと「何だかまだ信じられないわ」と妻は氷雨に煙るオペラ座の建物やリンク(旧城壁を取り壊して作られた市内を取り囲む環状道路。市電も走っている)沿いの大きなカスターニエンの並木道に目をやりながら「でも事情が許せば前回の時だって来ていたかもね」と付け加えた。妻のその言葉で13年前の、忘れたはずの哀しい別れが思い出された。

当時私は妻とは別居して2年近くたっていた。理由は福岡に住んでいた妻の母が入院し、一人娘の妻は看護のため帰郷したからである。病院に入院するのだったら福岡でも京都でも一緒だし、こちらで入院させれば済むことじゃないかと不満に言うのと、妻は母を見捨てるわけにはいかないと泣きながら私に謝り、荷物をまとめて福岡に帰ってしまった。義母は長年住み慣れた土地は離れたくない、留守にしている家も心配だと言って妻に帰ってきて面倒を見てくれるよう懇願していたのである。それから2年たっても妻は戻ってはこなかった。戻れなかったのである。妻が福岡に行って2年目に入る正月、酒の勢いを借りた私は電話で、母親を取るか自分を取るか決断するよう迫った。妻はしばらく黙っていたが、病気の母親を見捨てるわけにはいかないと答えて電話を切った。それ以降、私は妻に電話もかけなかったし、手紙も書かなかった。妻からは2、3度義母の病状を伝える手紙が届いたが、返事は出さなかった。そしてその年の夏、私は一人で東ドイツのヴァイマルへ出かけ、その後さらにウィーンに滞在した。ヴァイマルとウィーンでの2ヶ月の滞在の間に私は妻との離婚、かつまた知り合って2ヶ月にもならない別の女性との新生活を決意し、その女性と一緒にウィーンから日本へ帰るはずだった。だが実際にはそうはならず、離婚するはずだった妻を連れて今また私はウィーンへやってきたのである。妻はあの夏のことは何も知らない。あれはもう済んだことだと自分に言い聞かせ、私はつとめて明るく妻に答えた。「そうだね。13年前にも来れたかも知れないね。本当に」。

ウィーン到着から3日間、Hの家に世話になりながら、新聞広告や賃貸住宅情報雑誌をもとに、ようやく住む家も見つかった。若干狭くはあったが、家具やテレビ、食器類もすべてそろっていて、何一つ新しく買い揃える必要もなく、引越しのその日から住む事ができたのは有り難かった。ウィーンにはこうした賃貸住宅が結構多くあるようだった。場所は地下鉄3号線で市内中心部の聖シュテファン寺院から南の方へ下って九つ目の駅エンクプラッツから降りて徒歩2分という便利な所だった。この辺りはウィーン11区ジンメリングで、映画『第3の男』で有名な中央墓地にも割に近い所である。後に知り合いになった大統領府に勤めるA氏の家族は、われわれがエンクプラッツに住んでいると知ると「あの辺りは労働者の町で大変でしょう」と言われ、一体何が大変なのか分からず「え、どうして？」と思わず聞いてしまった。彼らの説明では要するに労働者が多くて雰囲気が悪いということらしい。しかしわれわれは全くそうしたことは感じることなく、買い物も便利だし、すっかり気に入っていた。

4月9日、ウィーン大学のP先生のゼミにでる。ウィーン大学の人文科学部はリンク沿いの風格ある建物の中にある。

ゼミは一人の男子学生以外はすべて女子学生という華やかな雰囲気。たまたま教室の後ろの方に座って隣になった女子学生と話を交わすと、彼女はポーランドからの留学生だという。さらにその隣の女子学生はルーマニアからの留学生とのこと。そうなのだ。ウィーンはわれわれが感じている以上にヨーロッパの東に位置しており、チェコの首都プラハよりも更に東、ハンガリーの首都ブダペストにも電車で数時間という所なのだ。だからウィーン大学には東欧からの留学生が多いのだろう。クラクフ出身というポーランドの女子学生に、クラクフで自殺したオーストリアの詩人トラークルの話をすると、とても驚いて「どうしてトラークルのことを知っているのか」と尋ねるので、卒業論文でトラークルを取り上げたことを話すと、彼女は恥ずかしそうに、彼の詩は暗くて哀しい内容のものが多いけれど大好きだと語り、クラクフの街も落ち着いた良い街だし、機会があれば是非訪れてほしいと言う。ルーマニア出身の女子学生は内気な性格なのか、われわれの会話にはほとんど参加しなかった。しかしながらどこか暗く寂しげな横顔はいつかどこかで見た事があるような気がして、妙に私の心に残った。

ゼミのあと、P先生の研究室で日本から持参した手土産を渡し、十数年振りの再会を喜びあった。P先生は当時に比べると頭髮に白いものが目立ちましたが、顔の色艶も良く、元気そうだった。近いうちに先生の自宅を訪れる約束をして研究室を出る。その後リンクを少し歩いてショットンリンクにある日本領事館で妻と落ち合い、新聞雑誌などを読み、衛星放送のNHKのニュースを見る。阪神が開幕7連勝したとのこと。日本にいたら連日テレビを見ながら祝杯を挙げていたことだろう。領事館では市民大学の生け花展の準備中で、数名の現地人が生け花をやっていた。少し見ていたが、生け花であって、生け花ではないような、どことなく奇妙な生け花だった。その後二人でリンク沿いにしばらく歩き、ウィーン市民の台所と呼ばれるナッシュマルクトで、目下ウィーン子に人気の「スシベントウ」を食べる。鮭とマグロ、それに正体不明の白身魚の握りが計4個、マグロの巻きが6個、味噌汁、野菜、スイカが付いて800円ほど。味はまずまずだったが、味噌汁はスープと見なされているのか、最初に出されたのには驚いた。食事をしながら領事館でもらっていた市民大学のパンフレットを見ていた妻は、われわれの住んでいる近くにも市

民大学があるのを見つけ、その中の英会話の講座に通いたいと言う。何もドイツ語圏のウィーンにまで来て英会話を習う事はないだろうと言うと、家にいても退屈だし、かといってドイツ語は難しそうだから、やる気はしないとの返事だった。

二日後、夕食を済ませると近くの市民大学の事務所に出かけてみたが、残念ながら妻が希望したレベルの英会話のクラスは受講生が少ないため、中止になったとのことだった。見るからにがっかりした妻が可哀相になり、上級英会話がどの程度のレベルなのか1度覗いてみて、もしついていけそうだったら途中参加してはどうかと勧めてみた。すると妻は乗り気で、来週早速そのクラスを参観してみたいというので、事務局の女性にその旨述べると、途中参加でも受講料は同じだが、それで構わなければ問題はないとの返事だった。

ウィーンに着いて2度目の土曜日の午後、電車に乗って中央墓地へ出かける。風が冷たく、それでなくとも人気のない墓地は何となく不気味な感じだった。恐がり屋の妻は私に寄り添い、「こんなところ私は嫌いだわ。早く出ましようよ」と言う。仕方がないので、ベートーベンやシューベルトなどのいわゆる楽聖たちの墓地を急ぎ足で見て回った。墓地を出るとすぐに電車が来たので、行き先は分からないまま終点まで乗って行くことにした。電車の終点は市内からかなり南に下がった感じだったが、どのあたりなのか分からないまま、さらにバスに乗り継いで行くと、バスの終点は「ガソ・メーター」だった。市内から地下鉄で帰宅する時に通る駅名が「ガソ・メーター」で、その駅の手前は地下鉄なのに地上を走っていて、古い煉瓦作りの巨大な煙突のような建物が見えていたが、それが「ガソ・メーター」だった。かつてはガス製造工場として使用されていたのだろうが、中に入ってみると、内部はモダンなショッピング街になっていた。妻は喜んでウィンドー・ショッピングを楽しむ。そういう趣味のない私は本屋で時間を潰し、1時間ほどしてケーキなどを買って帰宅した。

月曜日に早速近くの市民大学の英会話教室へ行ってみる。上級クラスには中高年の女性ばかり7名ほどが受講していた。ちょうど休み時間だったので、その内の1番人の良さそうな婦人に事情を話し、クラスのレベルを聞いてみると、名前は上級だが中身は中級、ないしはそれ以下だとの返事。使用しているテキストも見せてもらったが、たいしたことはない。そこへ若い男性の講師がやってきたので、改めて事情を話すと、今から授業を受けるように、とのことで妻は早速その時間から受講することになった。後で様子を聞くと妻は「少し難しかったけど、でも大丈夫。皆とても親切で愉快なおばさんたちばかり」と喜んでいて。夜は二人でオペラ座に出かけシュトラウスの『バラの騎士』を観る。

こうして私のウィーン留学は順調なスタートを切り、妻も英会話の婦人たちと授業のない日に一緒に郊外へ散策に出かけたり、彼女たちの自宅へ招かれたり、逆に自宅へ招いたりして、楽しく充実した日々が続いた。夜はほぼ毎晩オペラ座に通い、それまでオペラには興味のなかった妻も突然オペラの魅力に取り付かれたかのように、チケットが手に入らないときは立ち見席でも平気で観るようになった。またその間、念願だったトルコのイスタンブールへ4泊の旅行にも出かけたし、友人H夫婦とも週末は必ず会って近郊のドライブを楽しんだり、料理を持ち寄ってワインを楽しんだり、まさに充実した留学生活だった。4月に脳裏をよぎった13年前の事もすっかり

忘れてしまっていた。あの日までは。

その日は初夏を思わせる陽光溢れるさわやかな天気だったので、ウィーン郊外にあるユーゲント・シュティール様式（青春様式）の建築家オットー・ワグナーが建てたシュタインホーフ病院の付属教会聖レオポルドを見に行くことにした。リンクの国民劇場前の駅から48番Aのバスで30分ほどかかって郊外の病院へ着く。教会はこの病院の敷地内に建てられている。病院の門をくぐって坂道を10分ほど上り詰めると銅板で覆われた青い丸屋根の簡素で美しい教会がそびえている。しかし残念ながら時間外で中へは入れず、外壁は修復中だった。仕方がないのでベンチに腰を下ろし、右手前方に広がるヴィーナー・ベルクと呼ばれている低い山々の連なる郊外の景色を眺めながら、妻にユーゲント・シュティールやオットー・ワグナーについて説明する。

病院の門へ向かう下りの坂道で「ここは病院だって言ったけど、樹木が多くてまるで公園のようね」と妻は言う。そう言われれば日本の病院の雰囲気は皆無で、公園の雰囲気である。確かここは精神科の病院だったはずだが、と思い出していると、脇道から一人の若い女性が飛び出してきた、危うく妻とぶつかりそうになった。「フェアツァイUNK!」（ごめんなさい）と俯き加減に詫びの言葉を言った女性を見て驚いた。それはゼミで一緒のルーマニア出身の女子学生だったからである。「カーリン!」思わず私は彼女の名前を呼んでいた。彼女の方も私を見てあっと驚いた風だった。

「ヘア・プロフェッソア」と彼女は言った。例のポーランドの女子学生に自分のことを紹介したさいに、彼女は「まあ、大学の先生なの」と驚いて、それからは私が学生たち同様に名前を呼んでくれといくら頼んでも、面白がって「ヘア・プロフェッソア」と呼び続けた。それでカーリンも私のことをそう呼んだのだろう。どういう訳かカーリンは4月の最初の2、3回ゼミに顔を見せただけで、その後はずっと欠席していた。「カーリン、久し振りじゃないか。どうしてゼミに出ないのかい。今日は君もワグナーの教会を見にきたの」と私が尋ねると、カーリンは明らかに困惑の表情を浮かべて「病院に用事があってきたの。ごめんなさい。急いでいるものだから」と言うと、また小走りで病棟があると思われる方へ向かい、すぐに樹木に隠れて見えなくなってしまった。「知ってる人なの?」妻は不思議そうに私を見詰めて尋ねた。「P先生のゼミで一緒になったことがあるんだが、最近は来てないんだ。」「可愛い人ね。でも何だか暗い表情だったわ。病気なのかしら。」「かもしれないね。病院に用事があるって言ってたけどね」。

病院前から今度はバスで地下鉄3号線の終点オッタクリンクまで行き、そこからバスに乗って帰宅した。その夜ベッドに入ってもカーリンのことが頭に浮かんで眠れなかった。あの薫色の大きな瞳、少し丸みをおびた顔、つんととがった小さな鼻、軟らかそうな赤い唇、肩までかかる豊かな薫色の髪、そして全体に漂う寂しげな様子。まさか、そんなはずはない。いや、でももしかしたら...

眠れない夜を過ごした翌日、私は普段より1時間も早く大学に出かけた。ポーランドの女子学生をつかまえるためである。ようやく1階の回廊で彼女の姿を見つけたときにはもう11時近かった。

「ハロー、ヘア・プロフェッソア!」いつも通り、彼女は陽気に答えた。私は挨拶もそこそこにカーリンのことを尋ねた。勢い込んで尋ねる私に多少驚きながらも彼女は知っている限りのこ

とを教えてくれた。それを聞いて、まさかと思っていた私の予想は確信に変わっていった。何という偶然だろう。カーリンはあのマリアの娘なのだ。13年前、私が妻と離婚して、新しい生活を始めようと決めた相手がマリアだった。あのマリアの娘。「どうしたの？ヘア・プロフェッサー！」顔色を変えた私を不思議そうに見詰める彼女をその場に残したまま、私は教えてもらったカーリンの住所を尋ねるために走って構内を出ると、ショッテンリンクの駅から38番の市電に乗った。ホイリゲという自家製のワインを飲ませる店が立ち並んでいることで有名な郊外のグリンチングへ向かう電車の車窓からぼんやりと町並みを見詰めながら、13年前のマリアとの出会いと別れを思い出していた。

誰も予想さえしなかったベルリンの壁が崩壊し、一挙に東西ドイツが再統一へ向かうことになる1989年。この年の夏、私は旧東ドイツの小さな町ヴァイマルにいた。ゲーテとシラーで知られる有名なこの町で毎年開かれていたイエーナ大学主催のゼミナールに参加するためである。このゼミナールには主として東欧諸国の大学の教員が参加しており、いわゆる西側諸国からの参加者はごく僅かで、日本からの参加者は私を含めて3名しかいなかった。

東ドイツに入るのは初めてではなかったが、西ドイツ領を離れて東ドイツ領に入り、検問のために車両に銃を構えた国境警備兵が乗り込んできた時は、さすがに緊張した。どうしてそれほど時間がかかるのか分からなかったが、列車は1時間ほども停車していた。同じ車室の乗客は全員が東ドイツ人のお年寄りで、西ドイツにいる親戚を訪ねての帰りで、親戚訪問の真の目的である土産物をどっさり持ち込んでいた。土産物の中身は紙おむつ、バナナなどの果物、ネスカフェーといった、東ドイツでは入手困難な品物だった。検問で待たされている間に、私は老人たちの格好の好奇心の的となり、質問に答えるのに大変だった。そうこうしている間に突然列車は動き始めた。しだいに西ドイツの田舎の風景と一見同じように見える風景が広がってきたが、よく見ると微妙に違っているのが分かる。その違いは一言で言えば、すべてが少し貧相で、荒れていることである。農家の造りも小ぶりで、瓦や壁もどこことなく古びている。刈り入れ前の麦畑も手入れが悪いのか、倒れてしまったものも多く、あちこちにぞんざいに農機具の古いものや使い物にならなくなったものが放置されている。町の様子も何となく西の華やかさはなく、どこも煤けたように見える。煤けて見えた理由は後で分かったのだが、暖房に質の悪い褐炭を使用しており、その煤があちこちの煙突から降ってくるためだった。そのため空気も煤けていて、私はヴァイマルに到着した翌日から、喉を傷めてしまった。そしてそれが契機で私とマリアとは親しくなったのだった。

ヴァイマルの駅に降り立つと、ぷーんとアンモニアの臭いが漂ってきた。駅のトイレから汚物が溢れているせいだった。これがゲーテ、シラーの町なのか、と私は愕然とした。駅前から見える建物も煤けている。このまますぐに西側に戻ってしまおうか、と一瞬思った。そのとき一人の若者がにこやかに「ゼミナールに参加する方ですか？」と声を掛けてきた。そうだと答えると「向こうに車を用意していますから乗って下さい」と言う。案内されて、用意してくれていた車の側まで行って思わず笑いそうになった。東ドイツの乗用車「トラバント」である。車体は紙製だとの噂もあったが、触ってみるとプラスチックのようだった。そのトラバントで猛烈な排気ガスを撒き散らしながら、若者は宿舎になっている「ホスピーツ」まで運んでくれた。「ホスピ

ーツ」というのはもともとは修道院に設けられている巡礼者用宿泊所のことであるが、ほぼホテルのようだった。私に割り当てられた部屋に入ると、二部屋からなっていて、手前の部屋にはダブルベッド、奥の小部屋にはシングルベッドが置かれており、そのシングルベッドの置かれている部屋はすでに先着があり、荷物を置いていた。私が手前の大きな部屋を一人で使用してもいいのかな、とっていると夕刻にもう一人ベトナム人男性がやってきた。まさか男性二人でダブルベッドに寝るのも妙なので、フロントに頼んで小型の簡易ベッドを運んでもらい、それを私が使用することにした。

翌日から早速ゼミナールが始まったが、私たちのゼミナール担当教員はイエーナ大学でロシア語を教えているという40歳前半の女性だった。クラスは15名ほどで、全員が東欧諸国から来ていた。そしてマリアがその中にいた。マリアも私と同じホスピーツに泊まっていたこともあり、ゼミナールの教室でも並んで座るようになった。ゼミナールが始まって1週間ほどたった頃、私は喉が痛くてたまらなくなった。この年の東ドイツの夏は冷夏で、8月でも朝夕は暖房を入れる日が多く、暖房用の褐炭の煤で喉をやられたのだった。あいにく日本から薬を持参していなかった私はマリアに薬を持っていないか尋ねたところ、翌日彼女は薬を持ってきてくれた。その薬のお陰で喉の痛みは良くなった。数日後、薬のお礼と、もらった薬は全部のんでしまったことを告げると、マリアは一瞬困った様子を見せ、ルーマニアでは薬がなかなか手に入りにくいものだから、と恥ずかしそうに告げた。私はしまった、と思った。日本とは違い東欧では薬を始め、様々な品物が手に入りにくい事実をコロリと忘れていたのだった。つい数日前にアメリカ製の煙草の事でそのことを体験したばかりだったというのに。私自身は煙草は吸わないのだが、空港で免税のケントを一箱買ってきていたので、ある時われわれの世話係りのイエーナ大学の女子学生が煙草を吸っているのを見て、お礼のつもりで数箱手渡すと、普段は無口で無表情の彼女の顔がパット輝き、私の頬に感謝のキスをしたのだった。さらにそれをどこかで見ていたのか、それまで1度も口をきいたこともなかったブルガリアの大学教師のM氏までが自分にもケントを分けてもらえないだろうかと恥ずかしそうに頼みにきたのだった。東欧の彼らにとって西側の煙草は垂涎の的だったのだろう。そういえば不思議なことに東ドイツの各都市には西側の商品を買っている「ドルショップ」という店があった。ただしそこでは西側の通貨しか通用しない。私はマリアにお返しのためで早速ドルショップへ出かけて、薬を買おうと思ったが、残念ながら薬は売っていなかった。そこで口紅などの化粧品を買ってきて、マリアに貴重な薬を使ってしまったことを詫言、買ってきた品物を手渡した。マリアはまた一瞬困ったような様子を見せたが「では喜んでいただくわ」と気持ちよく受け取ってくれた。そのことがあってから私たちはさらに親しくなった。数日後、私は彼女を夕食に招待した。ヴァイマルの町で1番有名なホテル「エレファント」での食事である。食事をしながら言語学者である彼女からルーマニアは東欧に位置してはいるが、民族的には古代ローマ人の後裔で、言語もスラブ系ではないことなどを教わった。さらに建築技師だった夫と死別し、現在は6歳になる娘との二人暮らしで、娘は彼女の母親の元に預けてきたのだと言う。私も日本の大学でドイツ語を教えていること、このゼミナールの後は何度もお世話になっているウィーン大学のP教授の所に行き、9月の終わりに帰国する予定であること、また妻はいるが、現在は事情があってもう2年以上も別居中であることなども正直に話した。趣味の話ではお互いにバッハが好きなことでも盛り上がり、ワインを2本も空けてしまった。宿舎への帰り

道、「トミオはずいぶんお金持ちなのね」とマリアは言った。確かにホテルでの食事の代金は3百マルクを越えていた。日本円では2万5千円くらいだったのではないだろうか。しかしマリアには言いづらかったが、西ドイツ・マルクは東ドイツでは当時7、8倍の価値があり、ドルショップで買い物するためにゼミナールの参加者から東ドイツ・マルクを6対1で西ドイツ・マルクに替えて欲しいと何度も頼まれて2度ほど両替していたのだった。だから実際には4千円ほどなのである。

それからはゼミの後は毎日マリアと行動を共にするようになり、次第にお互い惹かれていくのを感じた。初めて唇を交わしたのは音楽会からの帰り、イルム河沿いを散策している時だった。長い抱擁の後、マリアは「日本人はキスなどしないのかと思ったわ。だってトミオは全くそんな素振りをみせないんだから」と言った。私は妙に恥ずかしくなり、それを隠すため何度もマリアと唇を交わした。

8月21日、ヴァイマルでの4週間のゼミナールは終了した。このわずか4週間の間に私とマリアとはもはやお互いになくはならぬ存在となっていた。私は別居中の妻との離婚を決意し、マリアと日本で共に暮すことに決めた。マリアも同意し、一旦ルーマニアに戻り、娘を連れて2週間後にウィーンで落ち合い、私と一緒に日本に行くことになった。だからヴァイマルでの別れは一時的な2週間の別れに過ぎず、二人ともウィーンでの再会を期して笑顔で別れた。

ウィーンでは友人に事前に頼んでいた8区のレルフェンフェルダー・シュトラークの古い集合住宅の1室を週払いの家賃で借りることができた。ここから大学までは歩いて行けない距離ではないが、市電を乗り継ぐと10分ほどだった。マリアは遅くとも9月の10日までにはウィーンの私の元に来ることになっていた。ただその前に手紙が葉書で状況を知らせることになっていたもので、私は毎日大学から戻ると真っ先に郵便受けを覗いたが、8月の終わりになっても、9月に入っても手紙は一向に届かなかった。私は段々不安になってきた。ウィーンの新聞やテレビでは東ドイツから大勢の市民が西側へ脱出し、東ドイツの政情が不穏となっていることを伝えていた。当然ながら独裁者チャウシェスクのルーマニアでも何らかの事態が生じているはずだった。私はマリアから知らされていた住所に2回ほど速達で手紙を書いたが、返事は届かなかった。約束の9月10日を過ぎ、日本への帰国が迫った21日になってもマリアからは電話も、葉書も届かなかった。私はマリアの気持ちが変わったとは思わなかったが、何らかの事情で出国できず、連絡もできないのだろうと思った。ただマリアには日本の住所も渡しておいたし、その内に連絡してくるだろうと考え、後髪引かれる思いながら一人でウィーンを後にした。

私は帰国後もすぐさまマリアに手紙を出したが、相変わらず返事はなかった。その年のクリスマスにクリスマスカードを送ったが、それにも返事はなかった。翌年の春、九州の義母が亡くなった。妻と話し合った結果、私は妻と再び一緒に住むことに決めた。元々私と妻とが対立していたわけではなく、妻は義母のために仕方なく、私と別れて住んだだけだったのだ。私はそれで良かったと思った。そして妻との新しい生活の中で次第にマリアのことは私の心の中から消えていった。

市電終点のグリーンチングで降りると、5分ほど山手の方に向かって歩いていく。ポーランドの女子学生から聞いていたカーリンの住所はこのあたりで新酒のワインを飲ませるホイリゲの一つ

だった。カーリンは私の突然の訪問にもさほど驚いた様子はなかった。彼女に促されて、すぐ近くの小川沿いの小道をしばらく黙って歩いた。しかしもうそれ以上待てなくなった私は勢い込んで尋ねた。「カーリン、君のお母さんはもしかしたらマリア・クラウディアという名前じゃないだろうか。13年前に旧東ドイツのヴァイマルで知り合った人だと思うのだが。」「ええ、その通りよ」とカーリンはあっさり肯定したが、どことなく哀しげな調子だった。「もしかしてお母さんから私のことを何か聞いてはいないだろうか。」「ええ、私はあなたのことは知ってるわ。P先生のゼミで初めてお会いしたときに、すぐに分かったわ。あなたが母の、母のトミオだってことが。母はトミオのことをいつも私に話してくれていたから。私は驚いた。「どうして分かったの？そんなことが。」「だって母はあなたが必ずいつかまたP先生のところへ来ると確信していたのですもの。だから私もP先生のゼミをとっていたのよ。私は驚きの余り言葉を失ってしまった。カーリンは母親の代わりに私をP先生のゼミで待っていたという。私はカーリンからこの13年間の出来事を聞かされた。

マリアは私とウィーンでの再会を約束してブカレストに戻ったのだが、帰国後すぐさま秘密警察に逮捕されたのだった。当時のルーマニアのチャウシェスク大統領は自分の独裁王国を維持するため、なりふり構わず秘密警察や共和国防衛隊を使って、民主化を求める人々を弾圧していたのだった。マリアの直接の容疑が何だったのかは不明だが、もしかするとヴァイマルでの私との交際が何らかの形で知られていたのかもしれない。信じられないような話だが、当時は西側の人間と親しく付き合っただけで危険人物とみなされ、秘密警察に睨まれるのはルーマニアだけでなく、東ドイツでも同様だった。マリアが釈放されたのはチャウシェスク大統領夫妻が処刑された、その年の暮れだったという。

理由は不明ながら大学に復帰できなかったマリアは友人の洋服店の店員をしながら娘と二人で細々と生活していたという。母親が亡くなった4年前、マリアはウィーンに出る決心をした。マリアの母方の叔父がウィーンで商売をやっていたからである。それがカーリンが現在住んでいるホイリゲだった。

「私は母がどうしてウィーンに移住しようと決意したのか、最初は不思議に思っていたの。確かにブカレストでは良い仕事もないし、叔父がホイリゲで成功してるし、母も私もドイツ語には不自由しないからいいんだけど。ある時私は母に聞いたことがあるの、どうしてウィーンなのって。その時初めてあなたの話を聞かされたの。13年前、母はあなたと一緒に日本へ行く決心をしていたんです。でも逮捕されてしまった。母は何とかしてあなたに連絡を取りたかったのだけどできなかった。釈放された後、母はすぐにあなたに連絡しようと思ったらしいの。でもしなかった。できなかったのよ、母には。母は約束の期日までにウィーンに来なかったし、連絡もしなかった。だからあなたは母が心変わりしてしまったのだと思って帰国したはずだ、そうでなければ日本からでも何らかの方法で連絡はあったはずだ、そう母は考えたの。でもあなたからは何も連絡はなかった。だから母は自分からあなたに連絡することは諦めたの。でも心の中ではずっとあなたのことを想っていたの。そしてもしかしたらトミオはまたウィーン大学へ来るのではないかと、そう期待したのよ。だから母はウィーンに来たのよ。母はそうは言ってはいないけど。私はウィーン大学に入れて嬉しかったけれど、一方で母のことが哀れで、P先生のゼミにはあまり関心はなかったけれど、もしかして、と出して出ている。でもあなたが本当にゼミに姿を見せた時に

は驚いてしまったわ。母から何度となく見せられていた写真そのままだったんですもの。私は驚きでしばらくは声もでなかった。日本から手紙を出したけれど戻ってきたことを話し、お母さんは何かの理由で出国できなかったのだらうと思ったこと、私もお母さんのことは忘れたことはないと話した。「それでお母さんには会えるかな。元気にしているのかな」と尋ねると、突然カーリンの表情がこわばり、そして泣き始めた。しばらくして泣き止んだカーリンから聞かされた話は余りにも哀しい内容だった。母親のマリアは2年前から精神に異常をきたし、私が5月にカーリンに偶然出会ったシュタインホーフの病院に入院しているが、病状は思わしくなく、いつ亡くなっても不思議ではないとのことだった。「面会は可能なのだろうか」と尋ねると、可能だけれど、何もしゃべらないし、何にも反応しないとの返事だった。私は早速明日にでも面会したい旨を告げ、病院でカーリンと落ち合うことに決めた。

シュタインホーフの病院で私は13年振りにマリアに再会した。残酷な言い方をすればマリアの骸と再会したという方が正確かもしれない。鶯色の大きな瞳、色白の丸みをおびた顔、つんととがった小さな鼻、軟らかな赤い唇、肩までかかる豊かな鶯色の髪。マリアからそのすべてが失われていた。私の呼びかけにも何の反応も示さず、ベッドに横になったまま、目も閉じたままだった。ふと思いついた私は「ふるさと」の歌を低くうたった。それはある時マリアから日本の歌をうたって欲しいと懇願され、うたったものだった。マリアはとても喜んで是非覚えたいということで、何度となく一緒にうたったものだった。「兎追いしかの山、小鮒釣りしかの川...」。一瞬マリアの目が開いたかのように思えたのは、私の感傷のせいだったのかもしれない。うたい終わって私は病室を後にした。それが私がマリアを見た最後だった。1週間後、マリアは亡くなった。

マリアの死後、私は妻には気付かれないようにと努めてはいたが、何をしてもすぐに暗澹とした気持ちになるのをどうしようもなかった。ほぼ毎日二人で通っていたオペラも仕事を理由に妻だけ行かせる日が多くなっていった。そんな私に妻は多少不審気な様子を見せることがあったが、特に問いただすことはなかった。

6月26日、この日はわれわれの結婚記念日だった。私はこの日でマリアとのことはすべて忘れようと思った。私はあまり乗り気のしない妻を誘って郊外電車で1時間ほど揺られてウィーンの南にあるバーデンという温泉地を訪ねることにした。電車の中で私が大正時代にバーデンで自殺した大津出身の女性ピアニスト久野久の話をする、ピアノを弾く妻は急にバーデンに興味を抱いたようだった。水着を付けてではあるが徐々に温泉に入り、ゆったりした気持ちになった。上品なたたずまいの落ち着いたバーデンの街が妻はすっかり気に入って、日帰りのつもりが泊まっていくことになった。夕食は結婚記念日だということで少し豪華な食事にブルゲンラント産の赤を頼んだ。食事をしながら私は妻に、帰国したら秋にでも久し振りに九州に行って義母の墓参りをしようという提案をした。妻は一瞬驚いた様子だったが、すぐに嬉しそうに肯いた。

7月初め、P教授のゼミの打ち上げで学生たちと一緒にラインツァー・ティアガルテンというウィーンの西にある旧皇帝の狩り場にハイキングに出かけた。そのハイキングで例のポーランドの女子学生から、カーリンが大学を辞めてルーマニアに帰国したことを聞かされた。帰国先の住所は知らないとのことだった。私はカーリンが住んでいたホイリゲに出かけて、叔父から住所を

聞こうかとも考えたが、カーリンが私に何も知らせずに帰国したのには、それなりの理由があったのだろうし、もしかするとカーリンの方から何か知らせてくるかもしれないと思い、そのままにしておいた。しかしながらカーリンからはその後何の連絡もなかった。

2ヶ月後、私の留学生活も終わりとなった。仕事の方はそれなりの成果も挙がり、家内も初めてのウィーン生活を大いに楽しんだし、まずは満足すべき留学だったと言えよう。しかしながら13年前とは異なる出会いと別離を経験し、新たな哀しい思い出を胸に秘めたまま、私は帰国の途についたのだった。